

地下式坑が作られた時代

今井 恵 昭

はじめに

地下式坑は関東地方を中心に中世後半頃に盛行する、屋敷周辺に掘削された地下室（ちかムロ）で、地表から縦に穴を掘り（堅坑＝出入口）、そこから横方向に広げて室部を作る構造の施設である。本遺構は謎が多く、未だ統一した結論を得るには至っていない。関東地方の中世後半頃の一般的な屋敷跡の周辺からは、ほとんど地下式坑が検出されると言っても過言ではないほど普遍的な遺構で、関東地方以外では九州北部にやや多く分布しており、その他、東海・北陸・中国地方の一部からも若干検出されている。また、東北地方などでも地下式坑と似た施設の存在が報告されており、類似した後世の室（ムロ）との識別が困難な施設も含めると、散在的ではあろうが、もっと多くの事例が広範囲に分布する可能性が高い。

関東の中世後半の遺跡では、遺物の出土が大変少なく、特に年代を決定する上で欠かせない焼物類が減少する時期である。従って、地下式坑の時期を推定する場合も、周辺や覆土から出土する数少ない遺物を手掛りにせざるを得ない。特に16世紀後半の多摩地域では、八王子城跡等の拠点の城館を除き、地下式坑を伴う一般的な遺跡からの遺物の出土は非常に少ない。伴出遺物から遺跡の年代を推定する調査担当者は、遺物がわずかに検出される16世紀前半頃で遺跡は放棄されたとの見解をとっているのが一般的である。従って、多摩地域では多くの遺跡が遅くとも16世紀中頃で姿を消し、後半は空白期となってしまう状況である。しかし、文献史料や伝承上では生活が営まれていることになっており、明らかに考古学資料と文献史料・伝承とに矛盾が生じる事態を招いている。この点に関しては、種々の問題を孕んでいるので後述することとする。

筆者はこの数年、謎の多い地下式坑に関心を持ち、数編の小論を書いてきた

(今井2004 2006 2007 2008)。これらの論文で、地下式坑は真言立川流（以下、立川流と記す）の影響を受けて出現し、関東を中心に盛行する遺構であるとの見解を述べた。あまりにも荒唐無稽な説であることから、当初から予想していたが、反響はほとんど皆無であった。その後発表した小論でも、地下式坑＝立川流説を補強すべく、後世に記された文献史料（『武蔵名勝図会』・『新編武蔵風土記稿』）等や（今井2012）、カモフラージュを目的としたと思われる井戸壁に付設された特殊な地下式坑等の傍証資料を挙げて論を展開した（今井2013）。立川流に関しては、度重なる弾圧により、後世の批判的文献を除き史料が残っていないのが現状である。

今回の論では、前論で書ききれなかった点を補足することを主眼として論じたい。内容は、中世の死に対する穢れ観念（宗教的側面）と、16世紀後半に世界規模で生じた通貨流通構造の変化から推定される関東地方の物流状況（経済的側面）、それに地下式坑を伴う遺跡が破壊されたり埋められたりする場合の背景（占領地支配政策的側面）等について若干の思考を巡らし、筆者の今後の研究方向を示すこととする。

現時点における筆者の関心事は、従来から主なフィールドとしてきた東京都西郊の多摩を中心とする地域における中近世移行期の歴史を明らかにし、他地域との比較を通して、より普遍的な歴史の流れの中に位置づけるという点にある。同時に隣接する他分野（民俗学・文化人類学・宗教学・経済史学・建築史学等）から当地（多摩地域）の歴史を見ると、どんな事象が浮かび上がるのかという事についても関心を持っており、これらの視点については筆者の歴史を見る目（歴史観）が問われることになると思われる。問題意識を持つと言うこと自体、観察者の視点に基づいた行為であるので、本論では筆者のやや不如意な歴史観についても、できうる限り明確にしながら論を進めることとしたい。

1 地下式坑の機能と穢れ観念（宗教的側面）

地下式坑の機能に関しては、研究者の統一した見解を得るには至っておらず、現時点における代表的な説として、穀物類等の農産物を主とした貯蔵施設説（笹

生2003)、一時避難施設説(シェルター説)(清野2009)、隠し物施設説(トランクルーム説)(黒尾2005)、葬送関連施設説(齊藤2007)、ないしはこれらの複数の機能を合わせ持つ多機能説等が提示されている。穀物類の貯蔵施設説は、ム口内から多量の炭化した穀類が出土した事例と、遺跡が台地上の湿気の籠り難い場所(主にローム層堆積地)に営まれているという点を根拠としている。シェルターないしはトランクルーム説は、戦国期という時期と建物跡周辺に設けられているという点(やや離れた場所も含む)と形状を根拠に唱えられている。葬送に伴う施設説は、竪坑やム口内から人骨や板碑等が出土するケースが多々見られることによる。この中には、具体的に禅宗の葬法であるとの説(江崎1985)があり、またム口内で遺体を骨化するための一次葬施設であるとの見方もある(半田1979)。各説とも説得的な面はあるが、反面否定的資料にも事欠かないのが現状で、決め手を欠いている。詳細については、近年東国中世考古学研究会と房総中世考古学研究会主催によるシンポジウムで詳しく論じられているので、参照されたい(東国中世考古学研究会 房総中世考古学研究会2007)。

筆者は地下式坑については、立川流に基づいた儀礼を行う施設で、遺体を室内で骨化し、得られた髑髏を加工して秘儀を行う場であると想定している。髑髏以外の骨は、地下式坑付近に掘削された土坑や古い埋没しかけた地下式坑の窪みに埋めたものと思われる。地下式坑のム口部床面から骨片(粉)が検出される事例は多々みられ、また覆土中から人骨片が出土する例も多数報告されている。地下式坑のム口部床面から1体から複数分の人骨が検出される場合は、何らかの理由で遺体が放置されてしまったケースが想定される。地下式坑内から馬骨が一頭分検出される場合があるが、密教儀礼に基づく屠殺後の埋葬と思われる(今井2008: pp.346-349)。一部解体されたケースも存在するが、多くの馬骨に解体痕が見られないことから、儀礼終了後にそのままの状態での埋葬したものであろう。中には馬骨とともに牛骨を伴う例もある(田中・竹田他2009)。以下、筆者の地下式坑に対する基本的認識を述べる。地下式坑で骨化される遺体は、屋敷の家長夫婦とごく身近な近親者のみで、他の居住者(直系以外の末端家人・下人・所従等)は、屋敷周辺に掘られた浅い長方形の墓坑に頭北面西(釈迦の入滅時の姿)して、足を軽く屈曲させた横向きの状態で埋葬されたと思

われる。このような墓坑は、家屋（掘立柱建物跡）周辺から地下式坑と共に多数検出されるのが一般的で、所謂「屋敷墓」の範疇に属する墓制と思われる。

各遺跡から検出される地下式坑の総数については、単基から百基前後までバラツキが見られる。勿論遺跡全体を調査する場合と、遺跡の一角のみの調査とでは、検出数に差が出るのは致し方ないことである。あくまで標準的なモデルとしては家長夫婦一世代数基が構築され、さらに一世代20～30年間隔で次々と構築され続けたとすると、多い遺跡では一族も含めると数十基という数になったのではなかろうか。立川流の儀礼で必要なのは骨化された頭骨（髑髏）なので、頭骨以外のまだ肉片の付着したような部位については、地下式坑周辺で焼いて処理した状況が、土坑群と共に検出される焼土跡から想定することができる。髑髏を使用した儀礼と言うと異常な行為と思われがちであるが、戦国期という時期を考えると、極端な事象ではない。織田信長が自分と敵対し討ち果たした浅倉義景と浅井久政・長政親子の髑髏を薄濃（はくだみ＝漆で固め金泥を塗る技法）にして側近と酒宴の肴にしたケースは、有名な事例であろう。戦国の世で頭骨は入手しやすく、立川流における髑髏加工は、我々が現在想定するほど特殊でグロテスクな行為ではなかったと思われる。

中世後半頃は、死穢観念に大きな変化が生じてくる時期である。中世前期頃において死穢は最も恐るべき穢れなので、絶対に忌避しなければならなかった。このような強固な死穢観念に風穴を開け始めたのが真言律宗（以下、律宗と記す）の僧で、代表的な人物として叡尊や忍性が挙げられる。彼らは恐るべき穢れに満ちた死者の葬送に対して、「清浄の戒は汚染なし」とのスローガンを掲げ、積極的に関わり始めた。つまり、戒律を厳しく守ることにより死穢から免れることができると解釈することによって、民衆の求めに応じて死穢を乗り越えて葬送儀礼を行った（松尾1995）。当時の官僧の世界は世俗化が進行し、仏教本来の戒律を守るといふ生活とは大きく乖離した状況であった。このような中で戒律遵守の生活は神仏の希求することでもあったことから、葬送儀礼（死穢）に携わること（触穢）に関しても神の許可が得られるとする解釈が生まれた。民衆は死者の救済を仏教に求めており、そのために僧が葬送儀礼を主導することを望んでいた。僧の触穢（葬送儀礼への参加）に関しては、神が容認するとい

う解釈から、さらに進んで僧が自らの力量で死穢を克服することへと発展した(船田2011)。この時代において、僧の葬送儀礼主導は画期的な出来事であり、民衆に大いに歓迎された。この流れは天台宗や禅宗・念仏宗にも及び、仏教は葬送儀礼を通して民衆の間に急速に普及するようになった(松尾2011)。後に葬式仏教と言われるようになる始まりで、死穢観念が大きく変容する時期でもあった。律宗の僧の活動はさらにエスカレートし、非人救済にも関わるようになった。積極的に民衆の間に入って種々の救済活動を行う僧集団の出現は、従来の天皇や公家を対象とした古代的な鎮護国家仏教とは異なり、民衆の救済を目的とした中世の新仏教に大きく変化させるダイナミックな実践運動の始まりであった。

律宗の戒律を厳しく守るという行為は、人間の多岐に渡る欲望を封印することでもあった。律宗教団の活動は、教義上でも深奥を極め、特に秘経「瑜祇経」(ゆぎきょう)の中の愛染明王をめぐる注釈活動が注目をあび、東密のみならず台密をも巻き込んで華々しく展開することとなった。この尊の修法は人間の根源的な愛欲や中世の王権と深く結びついており、各方面に大きな影響を与えた。この動きは力を増し、律宗という禁欲的な宗派の教義の中から、全く逆の愛欲を肯定する解釈が生まれて立川流が誕生することとなった。性(生)と死は表裏一体の現象で、立川流の中で性(生)と死の両極を巡る独自の解釈が展開し始め、世間の常識とは大きく乖離した儀礼が行われることとなった。ただしこのような流れは立川流だけのことではなく、他宗派や神道世界を巻き込んだダイナミックな動きとなり、「玄奥なる〈性〉のモチーフが宗教意識の深部を揺るがし、陰陽の二元的哲理が宇宙の真理とせりあがっていった、ダイナミックな〈知〉の運動としても把える必要がある」(山本1993: pp.324)とも論じられている。

立川流の教義は、上記のように中世初頭頃の忌むべき死穢観念とは非常に異なっており、死と親近感を有する観念が大きな比重を占めている。現代の我々の感覚からすれば、家の周辺に墓を設けるという行為に違和感を抱く人が多いが、地下式坑の営まれた地域ではごく一般的な風習であったと思われる。古代の畿内でも、「山城国愛宕葛野郡の人は、死者ある毎に家の側に埋めており、長

年の習慣となっている。今は京師に近い場所である。凶穢の影響は避けなければならない。国郡に命じて、禁止するようにせよ」(『日本後紀』延暦16年=797)との通達がなされたことが記録されており、この地域では一般的に行われていたことが窺える。畿内周辺で屋敷墓がいつ頃無くなったのかについては、本論の直接的なテーマではないので、ここでは深入りはしない。武蔵や相模地方では、現在でも東京都多摩地域や神奈川県相模原地域の市街地郊外の畑地の残る場所に点々と屋敷墓が残存している。このような状態を、筆者は前論で「多摩川流域では徳川方に従ってきた移住者が主体となって水田を主業とする村を営み、後背地の丘陵奥地では後北条方の人々が居残って伝統的な畑作主体の生業を営んだ結果」が、共同墓地(多摩川流域=徳川方)と屋敷墓(丘陵奥地=後北条方)の分布の差異に現れていると解釈した(今井2008: pp.348)。しかし、多摩川沖積地の日野宿周辺でも屋敷墓が存在している例(日野市遺跡調査会2003)を筆者が見落としていた。従って、日野宿本体は共同墓地へと変化したのが、宿の周辺では後北条方の人達が居残って継続して屋敷墓を営んでいたため、前論を訂正しておきたい。つまり、多摩川流域でも屋敷墓が設けられていた地域があるという事で、おそらく屋敷墓は地域によりモザイク的な分布状況を呈するものと思われる。ただし、徳川方=共同墓地、後北条方=屋敷墓とする筆者の基本的な考え方に変化はない。現在郊外で観察できる屋敷墓は、中世の遺跡に一般的な家屋のすぐ傍に設ける墓とは異なり、屋敷とは若干離れた場所に墓石を伴って整然と営まれている場合が多いが、これは中世の屋敷墓が近世的変容を遂げた姿で、変容の背景には少なからず穢れ観念が働いている可能性がある。

屋敷墓は、中世の関東の人々にとっては違和感のない葬法であったと思われる。むしろ身近な死者と強固な繋がりを維持することのできる葬法であった。つまり、人の死は強い穢れであるので、墓も含めて日常空間から遠ざけなければならないとする水稻農耕的観念に基づく墓制とは根本的に異なり、日常生活を営む屋敷の周辺に身近な死者を葬ることにより、死者と生者の交流をより密にできるとの観念が背景に存在していた可能性が強い。水稻農耕民にとっての穢れとは、水稻農耕を阻害する忌むべき事象であり、あらゆる方法で払拭しな

ければならなかった。特に死穢は穢れの最右翼に位置づけられており、墓も日常空間とは隔離された場所に寺院管理（一連の葬送関連儀礼を含む）の下で営まれる場合が一般的だった。代わりに清められた魂のみを位牌に移して仏壇で祀るという近世的崇拜形態が主流を占めることとなった。穢れの対極にある観念は清浄で、清らかな稲魂の象徴として天皇制が存在したのであろう。穢れない清らかな姿としての天皇（すめらみこと＝澄んで清らかな存在＝稲魂の象徴）の存在は、水稲農耕を主な生産手段とする社会にとって必要不可欠な制度だったと思われる。従って、天皇は在位中穢れを遠ざけ精進潔斎して慎まなければならなかった。天皇に慎みが足りないと天変地異が生じ水稲生産に災いが起こるとの信仰は、このような思想が背景にあるからであろう。つまり、稲の不作は天皇に原因と責任があるとの社会的認識である。古代・中世の官僧の職務は、清らかで穢れない天皇や臣下の公家に仕え、鎮護国家を祈ることであった。国家に対して重要な役目を担う官僧が、最も重い穢れである葬送（死穢）に関わること（触穢）は絶対のタブーであった。律宗の僧達は、このような強固な死穢観念や鎮護国家的な旧仏教を打破しようとしていた。

立川流の教義は非常に妖しげであるが、死から再生へと至る過程で、性が重要な役割を演じる現象は、人間にとって普遍的な永遠のテーマであり、何ら異端視すべき問題ではない。表現形態こそ違おうが、死と性と再生は宗教や哲学・芸術等の基層に横たわっており、象徴観念上においても我々の生を支える大きな命題でもある。愛や慈悲・共生などは世界宗教の上層に君臨する至上のテーマだが、その基層にはこれらのどろどろした大海原が存在しており、密教はこの基層に働きかけることにより生の輝きを増大させる教えでもある。社会が危機的状况に直面すると、平常では潜在化しているこれらの存在が実生活上に浮上して、危機的状况を乗り切る大きな原動力となる場合が多々見られる。社会が大きく変動する時期に新たな教祖が出現して、死や性、再生を内包した旗幟を掲げて、混乱した社会の変革と再統合を成し遂げようとする宗教の動きは、現代社会においてもよく観察される事象である。かつて反社会的事件を犯し世上を震撼させ、現在も一部の迷える若者達を引き付け続けている問題の宗教も、現代という不安定な社会が生み出した現象であろう。

論はややそれだが、穢れに果敢に立ち向かう実践的な活動を行う律宗の流れの一部から、立川流に連なる動きが出てきた。さらにこの流れは死穢克服に留まることなく進展し、中世神仏世界において密教の深部に潜む性愛思想にまで至ることとなった。つまり、死から再生への過程で性の理論が大きな役割を果たすこととなり、立川流のような実践的流派が誕生した。このような流れは神仏混交である中世神道世界も同様で、当時の大きな歴史的潮流として把握することができる。

穢れ克服理論の深奥に潜んでいた小さな芽が発芽し、大きく成長して現実から乖離した異端の流派として登場することとなり、これが民衆に受け入れられたものと思われる。その社会的背景がどのようなものであったのか、社会史的観点からの究明が求められよう。

髑髏を用いて儀礼を行う立川流は、死に対して親近感を抱く文化が背景に存在することが想定される。つまり、水稻農耕とは異なる生産体系を持つ文化の存在である。徳川家康が入府して開田を盛んに行う以前の関東は、まだまだ畠作が主な生産手段であったと想定される。入府以前の生産方法を推定する史料として『武蔵田園簿』がよく引き合いに出されるが、これは慶安2・3年（1649・1650）に作成されたものなので、この頃になると、大河川流域の開田作業はかなり進捗していたと想定される。従って、入府以前の状態とは大きく乖離しているのではなかろうか。『武蔵田園簿』が作成された時期は、家康入府の天正18年（1590）以降60年が経過しているので、家康に従って20～30歳代で関東に来た人々でも、孫や曾孫の世代に交代していたことであろう。米の増産は、急激に増加する人口とパラレルな関係にある。多摩川流域での二ヶ領用水や六郷用水、日野用水等のインフラの整備と開田事業は、米増産に直結する大切な事業である。周辺住民を動員して行われた大規模な用水掘削と開田事業は、占領地支配の重要な政策となったものと思われる。

中世の関東に普遍的な地下式坑を伴う屋敷墓は、水稻農耕とは異なった畠作民的世界観（コスモロジー）に基づいた墓制だったのであろう。だからこそ、立川流のような異端の流派が、関東内陸部を中心に浸透したものと思われる。水稻農耕的穢れ観に基づく差別意識が東国で希薄なことは、雑穀畠作中心の生

産体系だったことによるのではなかろうか。かつて筆者は「このような現象は水稲農耕普及過程の時空軸にほぼ比例する」(今井2008: pp.348)と述べたが、まさしく水稲農耕文化の中に宿った穢れ観に基づく差別意識が水稲農耕普及と共に北上して、徐々に薄まりながら拡散していった状況が想定される。

2 通貨流通構造の変化(経済的側面)

筆者は前論で畿内を中心に拡散し始める人口増加と国際的通貨流通構造の変化(銀貨の普及)が重なり、後北条領国への物資の搬入が極端に減少した結果、特に16世紀中頃以降の遺跡が見かけ上ほとんど存在しないという現象が生じたのではないかと述べた(今井2013: pp.78)。この国際的通貨流通構造の変化について、若干の補足をしておきたい。

以下は浦長瀬隆の研究をもとにした記述である(浦長瀬2001)が、筆者の若干の見解を加えており、問題があれば筆者の誤読によるものである。16世紀になると明にも南米産を主とした銀が大量に流れ込んで銀本位制となり、私鑄銭の大量出現等とも絡み合っただけで銀貨の価値が不安定になってきた。この流れは日本にも波及して悪銭が大量に出回り、銀貨への信頼が揺らぎ始めたことから、各大名は撰銭令を出して通貨の安定を図ったが、上手く機能しない状態であった。そこで畿内を中心とした水稲農耕地帯では、従来から通貨代りに用いられていた米での納入が行われ始めた。このような動きに対して、伊勢以東の国々では永楽通宝を重用した地域経済が成り立っており、特に畠作の比重が大きい後北条領国では、永楽通宝を基準銭とした通貨経済が機能していた。

日本で銀が普及する以前に、西日本では従来の北宋銭が主に使用され、後から入ってきた歴史の浅い永楽通宝はあまり好まれなかった。従って、必然的に永楽通宝は関東に流れ込み、結果として後北条領や結城領で基準銭として使用されるようになった。また、九州や東北地方では、無文銭や洪武通宝が多く流通していたようである(櫻木2009: pp275-276)。16世紀後半は通貨の地域性が明瞭になってくる時期で、地域間を流通する商品の売買がどのように行われていたのかが重要な問題になってくる。

上記のような経済状態の下で、東西における流通通貨の違いが障害となり、西国から関東への物資の搬入に支障が生じ始めた可能性が高い。つまり、西国の商人にとって新たに加わった永楽通宝での決済は好ましいものではなく、後北条領国への物資の搬入は減少し始めたのではなからうか。さらに、畿内を中心として始まり周辺地域へ拡散する人口増加と経済活動の活性化(需要の増加)が品不足を招き、一層後北条領国への物資の搬入は減少したことが想定される。このような状況下で、西国では流通銭貨への信用が低下し、米遣いへと変化してきた。米遣いへの変化は、1560年代後半から1570年代前半にかけて西日本一帯で急激に生じたようで、米遣いはおおよそ30~50年間くらい続き、その後銀による支払いへと変化してきた。この時代は経済活動の活性化により商品流通が発達し、銭貨への需要が増加し始めた時期である。この頃の銭貨は、供給源である福建からの搬入に頼っていたが、突如停止する状態が発生した。搬入が停止した理由として、黒田明伸は以下のように論じている。明朝の対倭寇掃討戦の実施に伴い、「福建における1567年の公認交易への転換、そして1570年からのスペイン銀を媒介とする地球規模の交易網へのリンクにより、日本向けの私鑄銭生産と輸出が停止した。その結果が西日本での銭遣いから米遣いへの転換であり、ひいては貫高制ではなく石高制として知行統一が進む動機となった」(黒田1998：pp.22-23)。

上記の事情により輸入流通銭貨量が不足し始めたことから、国内でも私鑄銭が作られるようになり、従来の破損銭等も含めた悪銭が多量に出回り始めた。悪銭の流通は、市場での銭貨に対する信用を喪失させることとなり、市場に混乱を齎すようになった。そこで、従来から取引手段として使用され、安定した価値を有する米遣いへと変化してきた。ただし、旱害等による不作年の場合、一時的に銭遣いの比重が増す場合があった。銭は市場から完全に排除されてしまった訳ではなく、小額取引では継続して使用されていた。銭遣いから米遣いへの変化は急激だったようで、石高制への移行の先駆的現れであった。これらの変化は畿内を中心に始まり、地域差を有しながら周辺に拡大していった。

以上のような西国に対して、東国の場合はどのような状況だったのであろうか。関東・北陸地方ではデータが不十分なため、実態は不明である。東北(出

羽国)では15世紀から1600年代まですべて銭による支払いが行われており、西国で生じた米遣いへの影響が及んでなく、1610年代になると金の使用が始まる(浦長瀬2001)。東北の例から推定されることは、出羽国ではまだ水稲農耕が広く普及しておらず、米遣い地域に限界のあったことが想定される。畿内と出羽国の中間に位置する後北条領国でも、出羽国ほどではないかもしれないが、やはり畠作の比重が高いことから、永楽通宝を基準銭とみなした銭遣いが続行していたようだが、やはり通貨不足となり、永禄・元亀年間に銭納から現物納への変化が生じたという。後北条領国より以東の生産状況においては、必然的に米の生産量に限界があることから、支払い手段に事欠くこととなり、西側からの物資の搬入は極端に減少したことが想定される。この結果が、発掘調査で遺跡の年代を決める時の重要なメルクマールとなる焼物類の出土量の減少となるのではなかろうか。鋤柄俊夫の研究によると、京都では15世紀半ば以降各窯産播鉢の出土量の急激な増加が見られるという(鋤柄1996)。このような現象は、関東の陶磁器の出土量の減少と平行な関係にあることを裏付ける重要な資料であろう。関東地方のこの時期の各遺跡から出土する焼物類の総量を調べれば、どの時期が空白(ないしは極少)なのか、明瞭になると思われる。将来の課題としたい。

関東の広範囲な水稲農耕への移行は、家康入府以降と思われる。家康入府以降、関東郡代伊奈忠次等の主導により、各河川流域の大規模な開発が実施され、一気に水稲農耕への転換が始まった。勿論後北条時代に水稲農耕が全く行われていないということではなく、ある程度の生産は行われていたが、穀物生産全体に占める比重は大きくはなかったと思われる。場所により地域的差異はあるものの、概して海岸付近では西国からの影響が直接的に及ぶため水稲志向が強く、内陸部に行くほど畠作の比重が増すものと思われる。水田が存在したとしても、乾田と比較して生産力の低い湿田が圧倒的に多かった(原田2008: pp. 30-33)。

中世の鎌倉や小田原では、西国から米の移入が行われていたようである(永原1992)。このことから、関東の海岸付近では米志向の強かったことが窺われる。あくまで筆者の個人的見解であるが、世界観(コスモロジー)と生産方式

との関わりを考慮すると、西国（一部山間部等は除く）は水稻農耕に基づくコスモロジーであるのに対し、主に関東以北は概して雑穀畠作に基づくコスモロジーが基層に存在するのではなからうか。両者のコスモロジーは様相をかなり異にしており、文化や社会構造の差異からくる思考方法の違いが種々の相に反映するものと思われる。当然、この中には天皇制や被差別問題も含まれており、これらは非常に大きな問題なので、将来の課題としたい。

話は戻るが、関東の海岸部と内陸部の差異のような状況は、現代中国が参考になると思われる。つまり、海岸部では西側の影響を強く受けて西洋化し、内陸部では伝統的な生活様式を色濃く残した生活が営まれているという現象である。関東でも同様に小田原や鎌倉・品川港付近では西国からの物資と文化が直接的に齎され、主に河川交通を通じて内陸部に運ばれるが、奥地に行くほどこの影響は及ばなくなる。海岸部と内陸部との差異は、地下式坑の分布状況にも反映しているものと思われ、海岸部付近では分布が薄く、内陸部になるほど密になるのであろう。

以上述べたような状況下で西国からの物資（商品）が後北条領国に搬入されようとしても、支払い手段（金・銀・米等）がなければ購入することができなかったのではないか。また、西国では畿内を中心に人口増加が始まってきたので、当然需要も増し、後北条領国へ出荷する物資も品薄の状態が生じたものと思われる。つまり、16世紀中頃以降西国から後北条領国への商品の搬入が、事実上ストップに近い状態であった事が予想される。このような状況が、16世紀中頃以降から秀吉による小田原征伐（後北条滅亡）と家康入府の天正18年（1590）までの間の遺跡があまり存在しないという見かけ上の空白期間が生じた理由と思われる。家康入府以降一気に焼物類の出土量が増えるが、人と共に物品も多量に搬入されたことによるのであろう。

3 城割と屋敷の破壊について（占領地支配政策的側面）

多摩地域と周辺の中世後半の地下式坑を伴う遺跡の多くは中世末～近世初頭頃に放棄され、その後は別集団による別の形での利用がなされている場合が

多々見受けられる。筆者が前論(今井2008)で触れた三鷹市「島屋敷遺跡」(今井1998)・西東京市「下柳沢遺跡」(今井2004)・日野市「栄町遺跡群」(今井2007)は代表的な例であり、他に新宿区「北新宿三丁目遺跡」(谷川1993)でも同様のことが言えるのではないか。つまり、勝者である家康方が後北条方の小領主や土豪の屋敷を破壊して、新たに別の土地利用(家康方に属する者の屋敷ないしは田畠として使用)を行ったもので、家康による占領地域のスクラップアンドビルド政策である。家康方によるこのような行為は、八王子城の城下町である元八王子を離れて新たに八王子宿を設けたことや、前述の中世後半の日野栄町遺跡群から現日野宿への移転等にも通底する政策と思われる。このような行為の背景として、地域を支配していた小領主や土豪クラスの人達の領地からの追放と、その下で働いていた末端家人や下人・所従等の人達との分断が目的と思われる、勝者による占領地域の住人と土地をめぐる大規模な再編の行われたことが窺われる。内容はやや異なるが、立川市「普濟寺跡」(立川氏館跡遺跡調査会2000)については、立川氏退去後の鎮魂的意味を含む普濟寺の移転と思われる。

このような家康方の支配方法は、どのような経緯の下で行われたのであろうか。筆者は信長の政策との係わりに注目したい。信長は居城を転々と移動したが、家族を領地に残して単身赴任を続ける家臣に対して、屋敷の放火や屋敷木の伐採(竹木伐採)等を行って住めない状態にして移住を強制した行為や、敗者側の城を破壊する城割等の事例と通底する部分があるのではなかろうか。家康が入府に際して信長の行ったこのような行為を参照して、上記のような占領地政策を行ったのではなかろうか。

以下、この件について検討してみる。信長は大坂本願寺との和睦を受けて、本願寺支配地域の城割と検地を命じた。城割の結果、地域を支配していた小領主や土豪と領民との結びつきは絶たれ、地域社会の大掛かりな再編がなされた。城割は建物の破壊のみならず、堀の埋め戻しのような土木工事に関わる部分にまで及んでいた(藤原2010: pp.170)。堀の埋め戻しで有名なのは、大分後になるが慶長20年(1614)大坂夏の陣であろう。家康方は、大坂城の内堀まで埋めて豊臣家の滅亡を企てた。

このような事実を背景にして前述の遺跡を見ると、後北条方の地下式坑が検

出される遺跡を壊したり埋めたりしている例が多数見られることから、信長が家臣に対して行った家屋の放火や屋敷林の伐採、ないしは城割に通じる占領地政策との関係が想定される。敗者側の居館や城の破壊と、地域の支配者である小領主や土豪の主だった人々の移動（強制的？）はセットで行われ、代わりに新たな地域支配者として家康に付き従ってきた雑兵や人夫百姓の主だった人を配置し、在地に残された末端家人や下人・所従等の人々を管理下において、地域の再開発（主に用水掘削と開田）を行わせたものと思われる。

4 まとめ

以上、雑駁な論の展開となってしまったが、簡略なまとめを行うこととする。

地下式坑を営んだと見られる立川流の教義は、中世の死穢観念や律宗の禁欲的観念とは正反対の、死に対する親近感や性的欲望について肯定的観念に満ちている。このような流派が発生した背景には、立川流の母体となった律宗の密教教義の存在がある。この教義の中にある一部の思想が発芽して、死→性→再生というイメージの中で髑髏と性が大きくクローズアップされた結果、立川流の教義と儀礼が生まれた。また、地下式坑が立川流の主たる儀礼の場だとすると、地下式坑の密に分布する地域の世界観は、水稻農耕コスモロジーとは異なる畠作農耕コスモロジーであった可能性が高い。

多摩地域では、16世紀前半頃までに遺跡が終了してしまう場合が非常に多く、16世紀後半の遺跡はほとんど存在しない状況が見られる。このような現象は、遺跡の時期を決定するメルクマールとなる焼物類の出土のないことが原因と考えられる。この理由として、世界レベルで生じた多量の銀の普及によって国際的通貨流通構造が大きく変化し、この影響が日本にも波及して、西国から後北条領国に物資が搬入されなくなった可能性が高い。このような状況が、見かけ上遺跡が存在しないという現象を生んでしまったものと思われる。遺跡は放棄されたのではなく、継続して営まれていたと考えれば、文献史料や伝承との矛盾もなくなり、家康入府以降との整合性についても説明がつく。家康入府時点で、以下に記すように在地勢力の大規模な再編の行われたことが推測される。

多摩地域の中世後半の遺跡の多くが、埋められたり壊されたりしている。これは、新しい支配者である家康方が意図的に小領主や土豪の居住地を破壊し、家長クラスの人々を別地域に強制移住させて荒地の開拓に従事させ、在地に残された下人・所従等の人々を、家康方に従って来た雑兵や人夫百姓等の人の管理下で用水掘削や開田作業に従事させたものと思われる。このような家康方の占領地のスクラップアンドビルドを伴う人と土地の再編は、信長の行った政策にルーツを求めることができるのではなかろうか。家康が新領地である関東を治めるために勢力を傾注していた時期に、秀吉は朝鮮半島出兵へと突き進んだ。つまり、秀吉の目は国外侵略へと向いていたのに対し、家康は新領地関東の内政の安定と開発へと傾注せざるを得なかった。このスタンスの違いが後世に与えた影響は、非常に大きかったと思われる。

以上のことは、あくまでも筆者が主に東京都多摩地域を中心に実施してきた遺跡の調査から想定されることで、これらの仮説に対して種々の異なった見解が存在することと思われる。特に今回はあまり触れなかった地下式坑＝立川流の儀式が行われた場とする仮説に対しては、拒否反応を示す人々が圧倒的多数であろう。また、唐突な見解なので、どう対処していいのか戸惑っている方々もいるかもしれない。地下式坑という謎の多い遺構を取り巻く多様な見解が、中世後半から近世初頭にかけての時代の隠された面を切り開く突破口となつて、新たな地域史像を歴史の中に見出すことができれば幸いである。多様な見解のぶつけ合いの中から、思いもかけない豊かな歴史像が姿を現す場合もある。

歴史をより深く理解する方法として、現在直面している課題を過去に投影するという方法は参考になり、また逆に過去の人々が直面した危機的状況を現代に置き換えてみるとどのような事象が浮かび上がるかという方法も、歴史に携わる者としては心掛けておくべきアイテムであろう。「歴史とは歴史家と事実との間の相互作用の不断の過程であり、現在と過去との間の尽きることを知らぬ対話」である（E・H・カー1962：pp.40）との有名なフレーズは、現代でも色あせることなく我々の頭上に君臨している。対話の中でどのような質問を行うかが方法論で、質問の仕方により多様な答えが返ってくる。質問者の視点の中に方法論があり、方法論の違いによって異なる答えが導き出される可能性も

十分に考えられる。我々はそれぞれの問題意識に従って種々の質問を行い、遺跡を通して見る世界から豊かな歴史を蘇らせる義務が課せられている。

歴史に学ぶということは、過去の成功や失敗をも含めた事例を参考にすることでもある。図らずも先年考古学会が主役となった旧石器捏造事件は、その後続発する捏造・偽装・隠蔽事件の先駆けとなり、相次いで起こった三菱自動車リコール事件や雪印事件等の顛末は、現在でも鮮明に記憶している人が多いと思われる。また、旧石器捏造事件の前史となるが、1997年に起こった金融機関の破綻も、記憶に残る偽装・隠蔽事件であろう。このような一連の事件の教訓から、組織は失敗を犯してしまった時の対処法として、情報の隠蔽ではなく、公開と真摯な反省と謝罪こそ社会に許しをいただく最善の方法であるとの認識を得ることとなった。情報は一旦隠蔽してしまうと、その後も隠蔽せざるを得なくなり、隠蔽し続けるために次の偽装や隠蔽を犯す場合が多い。つまり、隠蔽は次の隠蔽を生み、疑惑に満ちた組織に変貌してしまうことになり、組織として存亡が危うい状態に追い込まれる。前述の組織を見れば一目瞭然である。その後の組織としての再生過程は、経験した人でしか語るることのできない悲痛な苦難の歷程が推察される。組織はこのような貴重な失敗の教訓を礎にして、問題を小さなレベルで処理する方法を学んだ。それは失敗を隠すのではなく、公開と真摯な反省と謝罪をするという方法であった。このような襖を経て、汚名回復のため長期間の努力を重ねることにより、再び世間の認知を経て復活を成し遂げることができる。最近外食業界で食材偽装事件が発覚したが、端緒となった組織の長は業界内向けとしか言いようのない釈明会見を行い、社会の猛攻にあって辞職を余儀なくされた。この様子を見ていた業界関係者は、自ら情報を公開して非を認めて反省し、改善を約して襖へと走った。貴重な過去の教訓を生かした処理方法を行うことにより、傷を小さなレベルで抑えることができるか否か、今後の対処の仕方次第である。やはり、組織の長の決断が、事後に大きく影響することは一目瞭然である。

旧石器捏造事件に関しては、完全に真相を明らかにできたとは言い難く、襖はまだまだ不十分と思われる。直接間接を問わず事件に巻き込まれてしまった関係者は、捏造事件が行われた状況と背景、発覚以前の偽情報を受け入れた社

会、発覚までの過程、発覚後の各関係者や組織の対応、またそれに対する社会の反応、事件の一応の終息とその後の社会に及ぼした影響等について、詳細に振り返って分析し直すことにより、貴重な社会知とすることができるものと思われる。捏造事件という負の遺産を忘却してしまうことなく、貴重な教訓遺産として広く世間に流布させ、次世代に伝えたいものである。

(2013.12.03稿了)

引用・参考文献

- 今井恵昭 1998『鳥屋敷遺跡』(財)東京都埋蔵文化財センター調査報告 第55集
- 今井恵昭 2004「下柳沢遺跡覚書」『研究論集』XX (財)東京都埋蔵文化財センター
- 今井恵昭 2006「多摩の近世村落と民家の成立」『研究論集』XXII (財)東京都埋蔵文化財センター
- 今井恵昭 2007「日野宿の成立」『研究論集』XXIII (財)東京都埋蔵文化財センター
- 今井恵昭 2008「中世から近世への移行」『生産の考古学II - 倉田芳朗先生追悼論文集編集委員会編』同成社
- 今井恵昭 2012「遺跡と文献から見た多摩地域」『研究論集』XXVI (公財)東京都埋蔵文化財センター
- 今井恵昭 2013「井戸に付随する地下式坑」『研究論集』XXVII (公財)東京都埋蔵文化財センター
- 浦長瀬隆 2001『中近世日本貨幣流通史—取引手段の変化と要因—』勁草書房
- 江崎 武 1985「中世地下式壙の研究」『古代探叢II』早稲田大学
- E・H・カー (清水幾太郎訳) 1962『歴史とは何か』岩波新書447 岩波書店
- 清野利明 2009「日野市程久保発見の「義経の隠れ穴」残影—「地下式坑」の機能を予察する—」『民具マリンズリー』第41巻12号 神奈川大学常民文化研究所
- 黒尾和久 2005「立川館跡の発掘調査をめぐって—多摩川中流域の中世考古学—」『多摩のあゆみ』第118号 (財)たましん地域文化財団
- 黒田明伸 1998「16・17世紀環シナ海経済と銭貨流通」『歴史学研究』711号 後に『越境する貨幣』青木書店1999に再録
- 齊藤 弘 2007「地下式坑葬送施設論」『地下式坑を考える—地下式坑の全国集成とその検討—』房総中世考古学研究会
- 笹生 衛 2003「地下式坑の掘られた風景」『戦国時代の考古学』高志書院
- 櫻木晋一 2009『貨幣考古学序説』慶應義塾大学出版会
- 鋤柄俊夫 1996「土器・陶磁器にみる中世京都文化」『図録 京都・激動の中世』京都文

化博物館

- 立川氏館跡遺跡調査会 2000『立川氏館跡』
- 田中純男・竹田均他 2009『柵谷遺跡』東京都埋蔵文化財センター調査報告 第235集
(財)東京都埋蔵文化財センター
- 東国中世考古学研究会 房総中世考古学研究会 2007『関東の地下式坑を考える—地下式坑の全国集成とその検討—』房総中世考古学研究会事務局
- 東国中世考古学研究会 2007『関東の地下式坑を考える—(2006.11.11)レジュメ集—』東国中世考古学研究会
- 永原慶二 1992『室町戦国の社会 商業・貨幣・交通』吉川弘文館 後に同社から歴史文化セブションとして2006年に復刊
- 原田信男 2008『中世の村のかたちと暮らし』角川選書425 角川学芸出版
- 半田堅三 1979「本邦地下式壙の類型学的研究」『伊知波良』2 伊知波良刊行会
- 日野市遺跡調査会 2003『東京都日野市 南広間地遺跡—一般国道(日野バイパス日野地区)改築工事に伴う埋蔵文化財調査報告書—』国土交通省関東地方整備局・相武国道工事事務所
- 藤田達生 2010『信長革命』角川選書484 角川書店
- 船田淳一 2011『神仏と儀礼の中世』法藏館
- 松尾剛次 1995『鎌倉新仏教の誕生』講談社現代新書1237 講談社
- 松尾剛次 2011『葬式仏教の誕生』平凡社新書600 平凡社
- 山本ひろ子 1993『変成譜—中世神仏習合の世界』春秋社